



「こんにちは 市長です」

10月15日号

「キャッシュレス 通帳レスに ハンコレス」(小寺道子) 読売新聞の編集手帳にあった。河野行革大臣が国のあらゆる省庁の行政手続きにはんこは使わないように号令を下した。お手本を見ると紙も使わず決裁はパソコン内で。議会が終わって役所内をひと回りしながら「大臣の意欲は感じるけど恐らくうまくいかないよ、ね」と職員に話し掛けてみた。「市長だってはんこ使わないじゃないですか」。確かに私の決裁はサインではんこは使わない。ただ、私が使わないのと河野大臣が言うレベルがまるで違う。サインにしたいきさつを少し話した。「面白いから広報に書いたらどうです」という。

市長になって数日後、秘書課長がいろいろ説明してくれた。その中に「はんこを用意しましょうか」というのがあった。もちろん用意してもらうことにした。書類が回ってきて「OKです」というときペタンとはんこをつく。そのために用意してくれる。ありがたいと思った。今でこそ職員には冗談言っていて笑わせているけど、当時の職員の目は冷やかかであった。現職と戦ったのだから無理もない。解きほぐす工夫をした。初登庁の朝、役所の玄関で職員を出迎えたのだ。一人一人に握手を求めた。そして、市長室に入る。課長ははんこを机の上に置いた。脇に、請求書がある。「何、これ？ 決裁専用のはんこでも自分持ちってこと？」「そうです」「じゃあ、ペンで決裁すると言ったらペンは自分で買うの？」「それは役所で買います」「インクは？」「役所です」ケチな話と笑ってくださるな。はんこは誰でも押せる。サインは自分だけのもの。いい選択ができたと言ったと課長に感謝した。

それ以来、あのはんこは秘書室長の机の中にある。たまには出番があるようだ。(10/2記)